

又、縦令貧窮苦學は已むを得なかつたとしても、當時さ程でもない凡僧が、堂々たる大寺の住持となり、紫衣を賜はり、師號を諡られたことに比べて見れば、彼が學の識の徳を以てして、しかも尙八十有餘歳の高齡に達して、總に大徳寺の住持たるべき勅請を拜し、歿後また何等の恩典にも浴しなかつたといふものは、如何にも權衡のとれない話である。勿論、彼一体にして、若し尋常一様の俗僧であつたならば、一身の榮達を計るがためには、隨分宮中へも押かけて行つたであらう、柳營にも出入したであらう、壯年にして早く既に大寺の住持ともなり、紫衣の僧ともなり、師號を諡つて貰ふ位の事は、苦もなく出来たであらう。否、皇胤たる彼一体にして、若し些子でも、そつといふやうな考があつたならば、望んで得られないといふことは、なかつたかも知れない。しかし、彼は、時の臨濟僧に對しては、縦令それが、先輩であらうが後進であらうが、隨分手ひどく攻撃もし、喧嘩もし、現に彼が五十一歳の時には、舜日峰大徳寺第三十六代の入寺を拒まうとしたり、五十三歳の時には、日峰の徒太平を喝破したり、六十一歳の時には、法兄たる養叟和尚(大徳寺第二十六代)と大喧

嘩をしたり、六十四歳の時には、春浦和尚(大徳寺第四十代)を痛罵して、その徒から害を加へられやうとさへしたことがあるといふやうな工合で、従つて彼等のために、憎まれ嫌はれ怨まれたといふやうなことも、多少彼が榮達を妨げたかも知れない。然り、勿論、それも一原因であつたであらうが、實は彼は、當時の一般宗家としては、餘りに見識が高すぎ、餘りに弘法の念が強過ぎて、そんな師號だの紫衣だのといふものは、彼の眼中になかつたのである。これを以て彼は、高名利達を糞土と見、富貴榮華を浮雲と眺め、一簑一笠に甘んじて、専ら化を四方の群生に布いたのである。即ち彼は、

名利と申すは、其身の名をあげ、人にほめられんとおもふ心をたねとして、
堂塔を建立し、時の富貴におごれり、かくの如き人を、佛はふかくきはせ
給ふ。

といひ、

へつらひてたのしきよりもへつらはで貧しき身こそ心安けれ
といひ、

迷道衆生劫外恩、人々涙不識窮途、諛官只願佳名發、眞菩提心一點無、
といひ、

昨日俗人今日僧、生涯胡亂是吾能、黃衣之下多名利、我要兒孫滅大燈、
といひ、恩師華叟が、掩光二十年の後、大機弘法禪師、號を勅諡せられし時、養叟
和尚に寄せた賀詩に、

曾謝塵寰五十年、芳聲美譽是何禪、子胥日晚倒行去、覲面辱屍三百鞭、
懶瓊辭詔也何似、猥芋烟鎖竹爐裡、大用現前眞衲僧、先師覲面潑惡水、
といひ、又臨濟曹洞の善知識が、貪欲熾盛なのを見ては、

米錢膝下露堂々、辛苦沈淪萬劫腸、賊智不妨過君子、德山臨濟沒商量、
と言へるが如き、當時權貴の門に出入するを以て、誇りとし、利欲の念の長じ
て居た臨濟僧とは、頗るその撰を異にして居たのである、

彼は、この見地から、社會の根本的改善を計らうとした、一面、時の社會の腐敗
墮落を救済して、これを道德的に改善しやうと企て、一面、更にその根本に溯
つて、道德の扶殖は、結局信仰問題の振作にありとし、頻りに布教傳道を試み

たのである、而して社會を根本的に改善し、信仰問題を振作するといふ段に
なると、何時でも第一に邪魔になるものは迷信である、虚儀形式である、人の
心に迷信の波の立ち騒いで居る間、人の行が虚儀形式の繩で縛られて居る
間は、到底改善の實は擧がらないのである、若し夫の迷信を勦絶し、虚儀形式
を破却し得むか、社會の改善は、こゝにその半に達したものと云つてもよい、
今彼一休は、果して如何にして、社會の根本的改善を爲さむとしたであらう
か、果然、彼はまた、この迷信の排斥と、虚儀形式の破壊とに向つて、まづその手
を下した、即ち彼は、人が死後の追善供養によつて、成佛するとかしないとか
思惟せることの迷妄なるを見て、

追善にあうた佛が盆棚へ年々くればうかむせはなし

と一撃し、又當時、京都の諸寺から、毎年七月十四日に、宮中へ盆燈籠を献納す
るといふ、虚儀形式の甚だ恐なるを厭ひ、

精靈今日出來迎、雨露直供萬葉棚、挑得燈明天上月、松風流水讀經聲、
と喝破して、遂にこの、朝廷に對する年來の恒例を廢するに至らしめた、(第九

章「一休の逸話第七參看」ところが、この事を聞きつけて驚いた有象無象が、一休のところへ押かけて来て、盆燈籠や精靈棚の用無用を詰つた。一休答へて、「イヤ、大きな精靈棚が飾つてある、ドレ見せてやらうか」と、一同を鴨川の邊まで伴れて行き、川の彼方を指して両手を擴げ、それ見よ、彼處ぢや〜」。

山城の瓜や茄子をそのまゝにたむけになせや鴨川の水

「この國中の瓜や茄子を精靈棚に見立て、この鴨川の水を手向の水にしやうではないか」と言つて、哄笑一番したといふことである。たゞこれ僅に一例にしか過ぎないが、此くの如きは實に彼が慣用の手段であつて、毫も珍とするに足らないのである。

又彼は、常に自由討究の主義を唱へて學徒に告げ、古則經論の教權に盲從し、徒に坐禪觀念しても、勞して功なきことを説いて曰はく、

凡參禪學道、須勦絕惡知惡覺、而至正知正見也、惡知惡覺者、古則話頭經論要文、學得參得、坐禪觀法、勞而無功者也、如是之輩、當代四百四病一時發、爲人所辱、是情識之血氣也、對閻老面前、有甚伎倆乎、獅子尊者斷頭、白乳頭露分明也、

正知正見者、日用坐斷涅槃堂底工夫、全身墮在火坑、子細看之、苦中有樂、若能見得、不昧撥無因果境、若見不得、永不成佛漢、可懼々々、

と、由來禪宗は、佛教各宗の中でも最も自由討究的の態度を執るものではあるが、法要や、御祈禱や、俗權のために願使せらるゝとの外に、餘り能のなかつた當時の臨濟宗中に在りて、尙且この言を作したのは、以て彼の偉なりしことを證するの、一材料とするに足るではなからうか。

又彼が、未來主義に反對して、現世主義を主張するに努めたること、その勢頗る旺なるものがある。まづ彼は、世人がやゝもすると、我が身はわるきいたづらものなりと思ひつめて、偏に佛陀の大悲を仰がうとするのを嘲つて曰はく、

つくり置く罪の須彌ほどあるならば閻魔の帳につけどころなし

世の中に慈悲も惡事もせぬ人はさぞや閻魔も困り給はむ

痛快の言、吾人は、血湧き肉躍るの感を禁することが出來ない、更に未來世を非としては、

本来もなきいにしへの我なれば死にゆく方も何も彼もなし
死して後いかなるものとなりぬらんめし酒だんご茶とぞなりぬる
といひ、我以外に佛といふものを認め、その力を借らうといふが如き、意氣地
なしを罵つて、

元の身は元のところへかへるべしいらぬ佛をたづねばしすな

ゆく水にかすかくよりもはかなきは佛をたのむ人の後の世

佛とて外にもとむる心こそまよひの中の迷なりけれ

と叫び、地獄を恐るゝ呆氣者を見ては、

みな人の貪瞋愚痴の悪水は三途の川の流とぞなる

六根につくる罪過のちりほこり四手の山路の高根とぞなる

鬼といふおそろしきものはどこにある邪見の人のむねにすむなり

と叱りつけ、更に現世主義の眞面目を吐露しては、

世の中は食うてかせいでねて起きてきてそのあとは死ぬるばかりぞ

と言つて居る。然り、實に人世は、食うてかせいで寐て起きてきてそのあとは

死ぬるばかりである。されど、こゝに注意しなければならぬのは、物質的旨
目的の現世主義と、吾人の謂はゆる現世主義とは似て非なるものであると
いふことである。前者は、たゞ社會目前の利害を見るのみであつて、永遠の理
想的發展を認めないところの短見であるし、後者は、即ち自己の活動、社會の
進化の上に樂天を觀じ、死と共に個性は絶滅するけれども、又更に社會的永
遠の生命があるといふことを確信し、この立脚地に腰を据ゑて、進修不息、以
て理想の活現を期するといふのである。今この一体の現世主義も、また夫の
淺薄なる物質的現世主義ではなくて、深遠なる理想的現世主義であること
は、言ふまでもない。

又世には、人間を以て、つまらないものである、意氣地のないものであるとし
て、たゞ一も二もなく、神に縋り、佛に頼らうとするものがある。その誤れるこ
と、殆ど言ふを價しないが、一休はまた、これをも見逃さずに、攻撃して居る。ま
づ彼はその汎神觀を歌つて曰はく、

あめあられ雪や氷をそのまゝに水と知るこそとくるなりけれ

吾人人類は、即ち唯一絶対の顯現であつて、

雨あられ雪や氷とへだつれどおつればおなし谷川の水

絶対は、即ち吾人人類のすべてである。こゝに於て、

釋迦も又あみだもとは人ぞかしわれもすがたは人にあらずや

といふ、大覺悟に到達するのである。夫の人生問題といひ、心靈問題といひ、何

と言ひ、彼と言ふ、悉くこれ自分の力を傾倒して、解決すべきもの、我以上に佛

を仰ぎ、我以外に神を求むること、畢竟何等の妄想ぞ、彼乃ち曰はく、

我心そのまゝ、佛いき佛波を離れて水のあらばや

夜もすがら佛の道をたづぬればわがこゝろにぞたづぬいりける

成佛は異國本朝もろとも、宗にはよらずこゝろにぞよる

と、よく這般の消息を、傳へ得たものと言ふべきではないか。

以上の外、なほ一休の見識の、頗る卓越せるものあることを見ることの出來
る一事がある。言ふまでもなく、宗教は、信念を生命として、人の心靈界を支配
すべきもの、政府の保護を哀請したり、政府の勢威を假つたりすべき筈のも

のではない。若しどうしても、そんなものゝ力を借らなければならぬと言ふ
やうになつては、最早、その宗教は死滅に近づいたものである。まして、これに
よつて虎威を借る狐もどきに、他宗他派に當らうなどゝは、言語道斷沙汰の
限りである。然るに、一休は、當時、權勢に阿附してその威を假り、時の政治に容
辱し得るを以て、無上の榮譽と心得たる臨濟の僧侶の掣に倣はず、全然俗權
の保護干渉を避け、銳意熱心、社會の下層に化を布いたのは、流石に偉僧の行
といふべきではあるまいか。

此の如く、彼一休は、眞摯熱烈なる信念に鞭つて、平民的教化に従ふと共に、社
會の改善を忽にしなかつた。迷信の排斥、虚儀形式の破壊にも力を致した。而
して其自由討究主義を主張しては、教權の重んずるに足らないとを教へ、現
世主義を説述しては、未來生活を難じ、汎神觀の立脚地よりして、一神の存在
を非認し、且、政治の保護干渉をも之を歎ばなかつたといふに至つては、その見
解の、頗る吾人のそれと、相一致する者があるに驚嘆するのである。

吾人の見解とは何であるか、吾人は、今を距ること六年の前『新佛教徒同志會』

といふ一團體を組織して、六條の綱領を發表した。

- 一、我徒は、佛教の健全なる信仰を根本義とす。
- 二、我徒は、信仰及道義を振作普及して、社會の改善を力む。
- 三、我徒は、宗教の自由討究を主張す。

四、我徒は、迷信の勦絶を期す。

五、我徒は、從來の宗教的制度及儀式を、保持するの必要を認めず。

六、我徒は、宗教に對する、政治上の保護干渉を斥く。

蓋し、現代社會の腐敗を慷慨し、現代宗教の墮落を痛憤し、これを洗滌し、これを救済しやうといふ、一片耿々の志の露現したものである。今此の明治の聖世を以て、足利時代に比するのは、頗るその當を失するのであるが、關黒であつた足利時代に於て、一休の如き偉僧の誕生を要したやうに、明治の現代社會には「新佛教」が興起しなければならなかつたのであるか。否、明治の現代社會に「新佛教」の興起したやうに、關黒であつた足利時代には、一休の如き偉僧の誕生を要したのであらう。

附記

世間に流布して居る一休和尚の事蹟には、随分甚しい誤謬のあるといふことは、前既にこれを述べたのであるが、今その重なる二三の事柄に就いて、愚見を述べて置かうと思ふ。

一、一休と大徳寺

一休和尚と言へば、誰でも直ちに、紫野の大徳寺を想ひ起し、彼が出家の始めから、ずっと大徳寺に居通したもので、もあるかの様に考へて居るらしいが、それは甚しき誤りである。彼が一廉の僧侶となつてからは、大徳寺内の如意庵に住したこともあり、又彼が師匠の華叟や、法兄の養叟などが、大徳寺の住持となつたところから、自然大徳寺とは深い關係もつて居たが、彼が大徳寺の住持となり、大徳寺の「一休」と言はれることの出来るやうになつたのは、實に彼が八十一歳の時である。それとても、たい名前ばかりの住持であつて、絶えずそこに居たといふ譯ではない。現に彼が終焉の地さへ、大徳寺では

なくて、新村の酬恩庵であつた位である。酬恩庵について因に記す。元來一休は一簑一笠、身は行雲流水のごとく定まつた住家もなく、又永く一所に停住して居たのではない。たゞ所々方々駆け廻はつて、専ら平民的教化に従事して居たのであるが、その中でも、山城新村の酬恩庵は、餘程氣に入つて居たものらしく思はれる。この酬恩庵といふのは、大應國師が開かれた妙勝寺といふ名利の境内の一小庵であつて、最初この庵に何か怪しげなものが時々出るとかで、誰が住持になつても、其夜のうちに居なくなるといふ始末、村のものも困つて居るところへ、一休が往つて、だんく詮索し、庵の椽の下に、金瓶が三個埋めてあつたのを發見し、それを然るべく分配して、この庵を立派に建て直し、一は先住追福の意をも表し、一は自分の住居としたのである。こゝにいふ因縁もある上に、都離れて居るから、當時世の中のとさくさの影響もなく、殊に風景も好いので、屢々こゝに錫を留めるに至つたのであらう。

二、一休と養叟

一休が六歳の時に、大徳寺の養叟和尚の弟子になつたといふのが、普通に信

せられて居る事實であるが、これも殆ど辨明を要しない程の著しい誤謬である。彼が六歳の時に、安國寺長老像外鑑の侍童となつたといふことも、十三歳の時に、慕詰攀公に詩を學んだといふことも、十七歳から五年の間、清叟仁藏主と爲謙翁とに就いて研鑽したといふことも、二十二歳の時から、江州堅田の華叟に就いて苦學したといふことも、一點疑ふべからざる事實であつて、殊に養叟も一休も、共に華叟の弟子で、たゞ養叟は一休の法兄であつたと言ふだけである。一休が廿六歳の時、養叟が華叟の像讚の事から、ひどく華叟の怒を招いた時に、一休がとりなして、華叟をなだめ、養叟を替めて、兄能く膽を替めて忘るゝこと勿かれと言つたのも、『延寶傳燈錄』に、華叟の法嗣として六人を挙げ、その第一が養叟で、第二が一休としてあるのも、共に彼等が法兄弟であつたといふことを證するに足るのである。そして、華叟は養叟よりは寧ろ一休を愛し、一休を信じ、一休に望を屬して居た。それは、華叟が一休に與へた夫の遞代の券の奥書に徴してもわかるし、又一休が廿九歳如意庵で三十、三回忌齋を行つた時に、光日照といふものが、華叟を尋ねて來て、和尚百年の

後法を付するは誰人ぞや」と問ふたら、華叟が「風狂といふと雖も箇の純子あり」と答へたことに徴しても、知ることが出来るのである。又一休と養叟とは、その年齢が僅に十八歳しか違つて居なかつた。これを坊間傳へられて居る、夫の白い長い肩で、テラ／＼ひかつた頭の大徳寺養叟老和尚が、六七歳の小坊主の一休と、魚の引導の掛合をする繪なんぞに考へ比べて見ると、たい噴飯に堪へないのである。

三、一休と義滿

一休がまだ小坊主の時に、大徳寺の養叟和尚が、時の將軍義滿のところへ連れて行つて、義滿が一休をして、衝立に書いてあつた虎を縛らせるといふ話などは、一休の事蹟中、最も光輝ある部分として、語り傳へられて居るのである。しかし、小供の時には大徳寺に居なかつたといふことも、又養叟和尚の弟子ではなかつたといふことも明になつて見ると、この話も、半分は嘘といふことになる。しからは義滿將軍に面謁したといふのは、事實であるかどうかを吟味して見るに、一休が義滿に謁したといふことは、『野史』にも出て居て、そ

の一休の傳の中に、

應永十八年、見大將軍足利義滿于僧仁清室、

とあるが、しかし、足利義滿は、應永十五年に薨去になつて居る。十五年に薨去になつた義滿に、十八年に面謁するといふのは、勿論受取れない。こは定めて、何等かの間違であらうして見ると、義滿に面謁したといふことまでが、嘘であるといふことになつて、従つて鬻虎を縛るといふ面白いお話も、種なしになる譯である。

ところが、『一休年譜』には、一休が十八歳の時、顯山相公が清叟仁の庵室に到り、その時一休が始めて相公に謁したといふやうに記してある。本書第五章六十一頁參看。顯山相公とは、即ち足利義持の事で、『後鑑』義持將軍記第十七(應永十八年)十二月の記に、

是月、將軍家渡御仁清庵室、僧一休拜謁、

とあるのを見ると、これはどうしても、義持將軍に謁したといふのを正しいとしなければならぬ。それも、一休が師匠清叟仁藏主の庵室で謁したので

あつて、こちらから推参して、拜謁を許されたといふやうな次第ではない。して見ると、大徳寺の養叟和尚が、一休を連れて義満將軍に謁したといふ話は、全然無根であるといふことになるのである。

四 一休の子

こゝに一つ重要な問題がある。それは一休に一人の子があつたといふことに就いてある。禪宗は勿論肉食妻帯を禁じてある宗旨であるが、しかし、此の宗の坊さん達は、この禁戒を破ることを何とも思はないこと、實に不思議な位である。一休もまた酒も飲めば肉も食べる、随分女犯もやつたらしい『狂雲集』に、

同門老宿誠余姪犯肉食、會裡僧喚之、因作此偈、示衆僧云、

爲人說法是虛名、俗漢僧形何似生、老宿忠言若逆耳、昨非今是我凡情、
といふ偈さへ載つて居るのを見ても、彼が公々然として、姪犯肉食したといふことがわかる。實は當時の老宿といふやうな連中でも、随分一休そつちのけといふ勢で、姪犯肉食して居たものもあつたのだらうが、彼等はさすがに、公

々然としてこれを行ふ程の勇氣がなかつた否、それほど正直ではなかつた。陽に、道德堅固に行ひ濟して居るやうな風をしながら、陰に、天蓋を被り、般若湯を飲み、大黒の膝を枕にするといふやうなことは、盛に行はれて居たのである。此くの如きに比し來れば、一休が、公々然としてこれを爲して、毫も憚る色の無かつたのは、寧ろ無邪氣にして、頗る諒とすべきものがある。一休の意或は、肉食妻帯の眞理を看破したるにもよるべく、或は當時の老宿等が、言行相表裏せるを諷刺せんと欲せしにもよるのであらう。

そは兎に角、一休の子の事については、
僧となり、名を紹偵、號を岐翁と言つたといふこと。

攝津の櫻塚、及び堺に居たといふこと。

明人の書いた一休の像に、「尺八聲々吹又吹淫坊酒肆一生棲、瀟洒途轍少人踏、眼見東南竟北西」といふ讚をしたといふこと。

明應七年二月に、少納言菅原和長に、下矩偈を授けたといふこと。

明應七年に、七十二歳であつたといふこと、従つて、應永三十四年の生れで、

一休が三十四歳の時の子であるといふこと。たいこれだけしかわからない。「大日本史」や、「野史」にも菅原和長の「明應三年記」などを援いて、紹偵の事を書いてあるが、矢張りこれ以上の事は記してない。若し「明應三年記」といふものでも見たら、多少得るところもあるであらうが、遺憾なことには手に入らない。その母はどういふ人であつたかといふこともわからず、又紹偵が何歳まで壽命を保つて、何處で示寂したのかといふこともわからない。さりとて、全然これを抹殺するといふことは、猶更出來ない。たい、大方博雅の諸君子の、垂教を待つばかりである。

一休和尚傳 畢

教界偉人叢書第四編

一休和尚傳與付
並製價四十五錢
上製價六十錢

明治三十七年十月二日印刷
明治三十七年十月五日發行



著者 高島大圓
東京市小石川區原町六番地

發行者 清水金右衛門
東京市本郷四丁目五番地

印刷者 中村彌助
東京市京橋區日吉町十番地

製本所 片山吉次郎
東京市本郷春木町二丁目廿一番地

發行所 文明堂
東京市本郷四丁目五番地
(電話) 下谷二千二十九番

賣捌所 京興教書院 川瀨代助 東京上田屋 東京堂
名古屋

教界偉人叢書第二編 境野黃洋先生著

聖德太子傳

菊版二百二十七頁
寫真四葉入
並製四十五錢
上製六十錢

考古界第四篇第三號批評

本書は教界偉人叢書第二編として發行されたるものにして、從來教界に於ける偉人の眞面目なる傳記なきにより、宗教研究會と文明堂との共同事業として本書の發刊を見るに至りしと云、著者は本會會員にして佛教歴史に精通するを以て、氏の此著あるは實に適當と云ふべし、本書は單に太子傳と云と雖太子を中心として當時の有様を説けり、可なり太子は當時の代表者なり、蓋し太子時代の研究には考古學的智識を要するや論なし、されば太子傳中には考古學に志す者の參考すべきもの多きなり、卷頭なる法隆寺金堂・同塔・同堂安置玉厨子・金堂本尊釋迦三尊・同光背銘文・同堂安置藥師三尊銘文・上宮太子木像・天壽國曼荼羅殘缺・伎樂假面・上宮太子像・百濟買才木像等の圖は皆考すべき所なり、奈良朝に於て外國文明の事實を捨てば、恰も茶を煮、汁を除きて茶殻を飲むと同じきなり、此時代に於ける外國文明の事實を稱するが如く、我邦にては奈良朝の研究を以て考古學と稱するものあるに至れり、如此研究を稱するが如く、我邦にては奈良朝の研究を以て考古學と稱するものあるに至れり、如此考古學上の研究を要する太子時代は、又共に佛教史文化史上研究を要するなり、二百二十七頁の本書は言文一致を以て綴られ、奈良時代の一般を伺ふに足る、史學及考古學に志するもの一讀すべきの書なり、尙吾人考古學研究者より望むは挿圖増加と其印刷を鮮明ならしむるにあり、尙此叢書は發行の都度本誌に紹介すべし。(和田)

境野黃洋先生著

●佛敎史要

日本ノ部

正價金一圓
郵税金十錢

佐々木月樵先生新著

實驗の宗教

菊版美本三百頁餘
定價金六拾錢
上製 郵税金拾錢
郵券代用一割増

人格の感化は、大靈の活ける攝取也。著者自己心中の煩悶を醫し、大安住の地を得んとして焦慮する多年。時に傳教に行き、弘法に行き、源信に行き、妙恵に行き、道元に行き、法然に行き、日蓮に行き、親鸞に行き、蓮如に行き、白隱に行き、
各々其異なれる人格の上に光れる宇宙の靈氣に接し、ここに自己の信念なるものを得たり。宗教の確立を見るに至れり。
本書はカアライールの『英雄論』に似たり。エマーソンの『代表的人物論』に似たり。而して本書は之に同せず。その同せざる趣は讀んで明しならむ。
要するに本書は著者が人格の感化を受けたる靈感の記載也。故に、崇高なる人格に接して信念を得、修養に資せんと欲する人は、是非とも一讀せざるべからざる書也。

發兌元

東京本郷四丁目五番地

文 明 堂

文 學 士 近 角 常 觀 先 生

信 仰 問 題

寫 眞 版 數 枚 入

◎東京日日新聞批評

著者近角文學士は、近時佛敎界の秀才として氣焔家として頭角を現はせる人、歐米に遊ぶこと多年遍く世界宗教の趨勢を察して本書を著はせり
其説内篇、外篇に分ち内篇に於ては實驗の宗教、哲學の研究が佛敎信念の消長に與へし害毒、倫理問題の解決如何社會に於ける內的制裁力の養成、學生間に於ける信仰の勃興、活ける讀書と清新なる信仰、信仰と苦悶、修養論、
外篇に於て宗教問題解決の要點、英國又其宗教界、宗教形式の變遷、佛敎の見地に立ちて社會問題を解決す、社會の根底的改造、歐米各國に於ける宗教の特色、宗教的經營及社會事業を論ず
引證該博、識見高邁而も空疎ならず、近時佛敎界の一、大著と云ふに躊躇せず。 正價五十錢 郵税八錢

◎信仰の餘瀝

近角常觀先生著

第四版 價 郵税 二十五錢 二錢

東 京 文 明 堂 發 兌

著生先了圓上井士博學文

佛 教 通 觀

最新版 全二冊 價十五錢 稅六錢

井上博士自序の一節

抑々佛敎は多岐多端に分るゝも其要は身を生死の外に立たしめ、心を不動の地に置かしむるに外ならず、其理を講ずる者は是れ佛敎哲學者なり、今や戰國となりて海陸戰を交ゆ、是れ勅語の所謂一旦緩急、義勇奉公の秋にあらずや、義勇とは、義は忠節の意、勇は武勇の意に解して不可なるべし、而して武勇の要は身を生死の外に立たしむるにあり、忠節の要は心を不動の地に置くにあり、然れば今日、正しく佛敎哲學を實現するの時なり、但し其説く所、由來高尚に過ぎて解し難く、知り難からしめたるを遺憾とす。故に其解釋を通俗化して一般に普及の道を開くは實に目下の急務と謂ふべし、是れ本書發行ある所以なり。云々と以て本書の内容を知るべし。

東京本郷區四丁目五番地

文 明 堂 發 兌

文學士 清澤滿之先生著 三版

精 神 講 話

定價三拾錢 郵稅四錢 郵券代用二割増

精神修養に關する自己の經濟を講じたるものを集めて一冊子としたるを本書とす。故に本書に向ひて高尚なる論議や、難澁なる談話を望む者は恐らくは、何等の得る處なからしむ。されど眞摯に自己の精神の修養に心かける者、又は熱心に内心の安住を求むる者、一度本書を讀まば、其所得蓋し妙からざるべし。ともかくも本書は著者が精神上に實行しつゝあることを記したるものなるが故に、本書を讀む者亦精神を以て讀むべきなり。本

發 行 元

東京本郷區四丁目五番地

文 明 堂

清澤 滿之 多田 鼎 合著 三版
佐々木 月樵 曉 島 敏

精 神 主 義

定價三拾錢 郵稅四錢 郵券代用二割増

月なき夜の道を行く、旅人が望む北斗星。罪に悩める弱者が胸に宿れる光明。『精神主義』は苦みの谷をたどれる迷者が、恩の光明を認めたる歡喜の叫びなり。『精神主義』は社會に苦み、自己に悩める人が、導きの如來を信じたる安心の聲なり。『精神主義』は宗教の記載なり、信仰の表白なり。『精神主義』は事實の記載なり、經驗の懺悔たるものなり。我等の精神状態を有りの儘に表白し

露國トルストイ伯著
日本加藤直士先生譯
トルストイ伯肖像入

我宗教

第三版
大好評
大菊版三百三十頁
定價金七十五錢
郵税金十錢

此書は實に翁の生命也眞髓也骨子也。危然たる翁が無数の著述は一に此書の主旨を布演する者のみ。翁が人生觀宗教觀社會觀其の實行主義禁慾主義文明論非戰論等活如として卷中に眞に躍る。眞に是れ翁が心血を披瀝せるの名著也今や翁が「我懺悔」の譯者によりて邦語に譯述せらる。若夫書にして眞に讀まれんか當に我國の宗教界のみならず一般の思想界は爲めに其根底より顛覆せらる可き也。

◎「太陽」評 トルストイ伯が、露國及歐洲全土の宗教界を顛倒せしめたる宗教論の反譯なり譯文を明にして能く原意を傳へ得たり。

◎「報知新聞」評 トルストイ伯の生命とし血涙とし實什とせる、マイ、レリジョンを翻譯したるものなり、譯者トルストイ伯の書に私淑する頗る厚く早く曩きに我懺悔の譯あり。

◎「新佛敎」第三卷第四號評 嚮きに「我懺悔」を譯したる加藤氏は更にト翁が名譽「我宗教」を譯出せり意譯だけに行文甚だ流麗又譯文の痕跡を留めず、殊に原著を分ちて十三章となし、一々目次を附したるが如きは譯者の勞謝すべしとなす。

北露の偉人が如何に基督教を觀たるかは希くは此著にして其大要を知るを得んか。

文學士高瀬武次郎氏著

王陽明詳傳

五月十日發行
菊版三百八十頁餘
正價金七十五錢郵税十錢

文明堂發兌

本書は王陽明の事蹟性行學說を最も詳密に最も平易に述べたるものなり、陽明は文武兼備の豪傑、成功長く青史を照らし、文動遠く東亞に傳ふ、其傳記は變化に次ぐに變化を以てし、成功に繼ぐに成功を以てし、曲折千萬、趣味津々、一として吾人の龜鑑たらざるはなし、其學說は簡易直截、實用活躍、入ること易くして入れば必ず得る所あり、其の主眼とする所は良心の光明を發揮し知行をして合一ならしむるに在り、其傳其學、一種瀟灑平たる活氣を帯び、最も精神を奮起せしむるに力あり、是を以て世人遂に精神修養と人物養成を以て陽明學の特長と爲すに至れり、故に今古陽明學に入る者赫々の偉功を立てざる者希なり、世の有爲の士、須らく來て陽明が成功の歴史を繙き簡易實用の學を味ふべし、

露國トルストイ伯爵著、日本加藤直士先生譯

我 宗 教

第三版
大好評
定價 三百三十頁
菊版 七十五頁
郵税金 十錢

此書は實に翁の生命也其髓也骨子也。危然たる翁が無敵の著述は一に此書の主旨を布演する者のみ。翁が人生觀宗教觀社會觀其の實行主義禁慾主義文明論非戰論等活如として卷中に眞に躍る。眞に是れ翁が心血を披瀝せるの名著也今や翁が「我懺悔」の譯者によりて邦語に譯述せらる。若夫書にして眞に讀まれんか曾に我國の宗教界のみならず一般の思想界は爲めに其根底より顛覆せらる可き也。

◎「太陽」評 トルストイ伯爵が露國及歐洲全土の宗教界を顛倒せしめたる宗教論の反譯なり譯文平明にして能く原意を傳へ得たり。

◎「報知新聞」評 トルストイ伯爵の生命とし血涙とし賣什とせる、マイ、レリジョンを翻譯したるものなり、譯者トルストイ伯爵の書に私淑する願る厚く早く譯きに我懺悔の譯あり。

◎「新報」評 第三卷第四號評 翁の士と云ふ可し。我懺悔を譯したる加藤氏は更にト翁が名著「我宗教」を譯出せり意譯に非ざらんか如きは譯者の勞を留めず、殊に原著を分ちて十三章となし、一々目次を附したるが如きは譯者の勞を留めず、殊に原著を分ちて十三章となし、北條の偉人が如何に基督敎を觀たるかは希くは此著にして其大要を知るを得んか。

文學士 高瀬武次郎氏著

王陽明詳傳

△五月十日發行
△菊版三百八十頁餘
△正價金七十五錢郵稅十錢

文 明 堂 發 兌

本書は王陽明の事蹟性行學說を最も詳密に最も平易に述べたるものなり、陽明は文武兼備の傑傑、成功長く青史を照らし、文勳遠く東亞に傳ふ、其傳記は變化に次ぐに變化を以てし、成功に繼ぐに成功を以てし、曲折千萬、趣味津々、一として吾人の龜鑑たらざるはなし、其學說は簡易直截、實用活躍、入ること易くして入れば必ず得る所あり、其の主眼とする所は良心の光明を發揮し知行をして合一ならしむるに在り、其傳其學、一種凜乎たる活氣を帯び、最も精神を奮起せしむるに力あり、是を以て世人遂に精神修養と人物養成を以て陽明學の特長と爲すに至れり、故に今古陽明學に入る者赫々の偉功を立てざる者希なり、世の有爲の士、須らく來て陽明が成功の歴史を繕き簡易實用の學を味よんし。

文學博士 松本文三郎先生著 最新版

佛教史論 佛典結集 第一編

紙質特撰印刷鮮明
菊版二百八十餘
上製定價金八十餘
郵稅金十一餘
並製定價金六十餘
郵稅金八餘

文學博士松本文三郎氏著

本籍最古の信賴すべき佛典結集四回の顛末を詳叙し、傍ら後代の書が如何に之を紛亂せしめたるかを指し、東西學者の妄說を列擧論破し、從來曖昧模糊の裡に沒了せられたる一切の眞蹟を立明し、之を附録したる佛敎史の最近最要大事實を一一見明断ならしめ、錫蘭島佛敎傳來の狀態を記し、印度王統年代を比較對照し、佛敎學者に並東洋史家としての地位を闡明する。此の坐右に缺く珍書なり。

●印 度 雜 事 新 版 稅 價 八 十 錢
●釋 迦 牟 尼 傳 近 刊 並 製 四 十 五 錢 稅 八 錢
上 製 六 十 錢 稅 十 錢

文學博士 前田慈雲氏著

大乘佛教史論

◎好評噴々第四版

菊版三百三十頁
並製七十錢稅八錢
上製九十錢稅十錢

本書は○大乗佛敎の源流を歴史的に論述したる者にして、議論最新考證該博なり。卷尾に大乗佛敎考を附録し、佛敎史を研究せんとする者は一讀、再讀すべし、大乗佛敎論者も必ず讀むべし。大乗非佛說論者も必ず見るべし。佛敎學校の教科書として尤も適當なり。

前田慈雲氏著
大乗佛敎問答 第四版 正價金 十五 錢
文學博士前田慈雲氏著 郵稅金 四 錢
小乗佛敎史論 最新版 並製 五 十 錢 郵稅 八 錢
上製 六 十 五 錢 郵稅 十 錢

文學博士 井上哲次郎氏著 好評噴々第十二版

釋迦牟尼傳

菊版三百余
並製六十錢 稅八錢
上製八十錢 稅十錢

明文堂發兌

釋迦の史傳として從來我國に行はるゝもの、其類小説的のものに非ずんば、空想の的、學者の材料と稀なり、博士に感お世界的大偉人の相の眞實の正確な材料を多年の研究の結果に此篇となる、其内此書の特徴を附記すれば、歐米學者の如何に聖傳を参考し、孔子、基督、マホメット等と併比較評論したる事及び佛敎を學ぶもの精細に其材料を研究法とを示した伏し識者の一覽を待つ

●敎界偉人叢書第三編 濱口惠瑞氏著

●曇鸞大師傳 近刊
敎界偉人叢書第二編 境野哲氏著

並製價四十五錢 稅八錢
上製價六十錢 稅十錢
並製價四十五錢 稅八錢
上製價六十錢 稅十錢

敎界偉人叢書第一編 小野藤太氏著

弘法大師傳

▲菊版洋裝二百二十頁
▲並製四十五錢 稅八錢
▲上製六十錢 稅十錢

●國民新聞 (一月二十三、二十四、二十五日) 批評

敎界偉人叢書の第一編なり。叢書全部二十五冊、宗教家、學者に依りて篇せらるべし。弘法の傳を記せんが爲めに先づ南都佛敎の概況を説きて大師の系譜に入り、少壯時代、獨修時代、在唐時代、密敎開立時代、成功時代、隱棲時代と項を分つて、而して後ち其事業を論ず。餘りに専門的ならざるは、普く讀者の了解し易きところなるべく、附録として大師の著書、弟子語、眞言密敎經論等を載す。全頁二百餘、滔々たる世の輕卒なる著書とは自ら撰を異にして、之れが編述に著者の勞を費やしたるべきは、信じて疑はざるどころなり。

文學博士 井上哲次郎先生閱 小野藤太氏著

●日本佛敎哲學 (新版)

菊版三百頁
價六十錢 稅十錢

明文堂發兌

海老名彈正先生 (大好評第七版發賣)

耶蘇基督傳

▲菊版二百七十頁
▲並製五十五錢稅八錢
▲上製六十五錢稅十錢

今や宗教を求むる聲、天下に溢れ且つ之を求むるもの唯理論のみを以て満足せず、直に偉人の胸臆を叩き活ける光明と生命とに接せんと此千古の宗教的天才を傳ふるもの、我國亦は單に福音書の切抜に止まり、或は主觀的理想未だ歴史考察の基礎に不足なる叙述なき本書は耶蘇基督の生れたる一國の歴史の人物として其時勢と周圍に於ける活動を描けるものに釋迦牟尼傳と相俟て我讀書界の多年渴望を満たすも謹謝の一閱

海老名彈正氏著

●基督教の本義

最新版 價五十錢稅八錢

海老名彈正氏著

●基督教三大訓註釋

好評第二版 上製價六十錢稅十錢

露西亞國史

羽花仙史 陸江保先生著

△四六版三百五十頁
△正價四十錢稅六錢
△郵稅 金 六 錢

明文堂發兌

本國露國累代の帝王、皇后、皇子、皇女等、多淫多慾、醜聲外に聞え、殘忍苛虐にして、恐怖、慘劇を演し、爲帝室の紊亂を來し、衆怨の府となれ、大小官吏が腐敗の極に達し、黄白の爲に是非を顛倒し、良民を苦しむるに、民が懶惰淫靡にして、風俗を壞亂せしむること、説き起し、同地が寒氣烈く、地味瘠て、植物の生長に、其結果として、露色に沈酒する悪習を醸したる等の奇談珍説、悉く巻中に露國の事情を知らんと必ず一讀せざるべからず。

貯金のすゝめ

本書は發行以來非常の好評を受け、其の發賣高十六萬八千部に達せり。訂正第三十版 △四號かなつさ △價廿八錢 郵稅四錢

文 明 堂 發 兌

文學士河澤滿之氏著

精神主義

▲▲第三版發行
▲價卅錢稅四錢

文學士河澤滿之氏著

精神講話

▲▲第四版發行
▲價卅錢稅四錢

南條井上村上三博士著

佛教講演集

▲▲第五版發行
▲價卅錢稅四錢

翠村濱口惠璋氏著

心靈之修養

▲▲第四版發行
▲價四十錢稅六錢

曉島敏氏著

吾人之宗教

▲▲第三版發行
▲價廿五錢稅四錢

添口惠璋氏著

青年之宗教

▲▲第二版發行
▲價四十錢稅六錢

浩々洞同人編著

佛教之信仰

▲▲第二版發行
▲價卅錢稅四錢

新佛徒同志會編纂

將來之宗教

▲▲諸大家筆跡入
▲價七十錢稅十錢

花田凌雲氏著

佛教倫理概論

▲▲第一版發行
▲價四十錢稅八錢

高橋鐵太郎氏著

海洋美論

▲▲風景寫真板數枚
▲價五十五錢稅八錢

佐々木月樵氏著

實驗之宗教

▲▲第三版發行
▲價六十錢稅十錢

楠龍造氏著

他力宗教論

▲▲並製五錢稅四錢
▲上製五十錢稅六錢

文學士近角常觀氏著

信仰問題

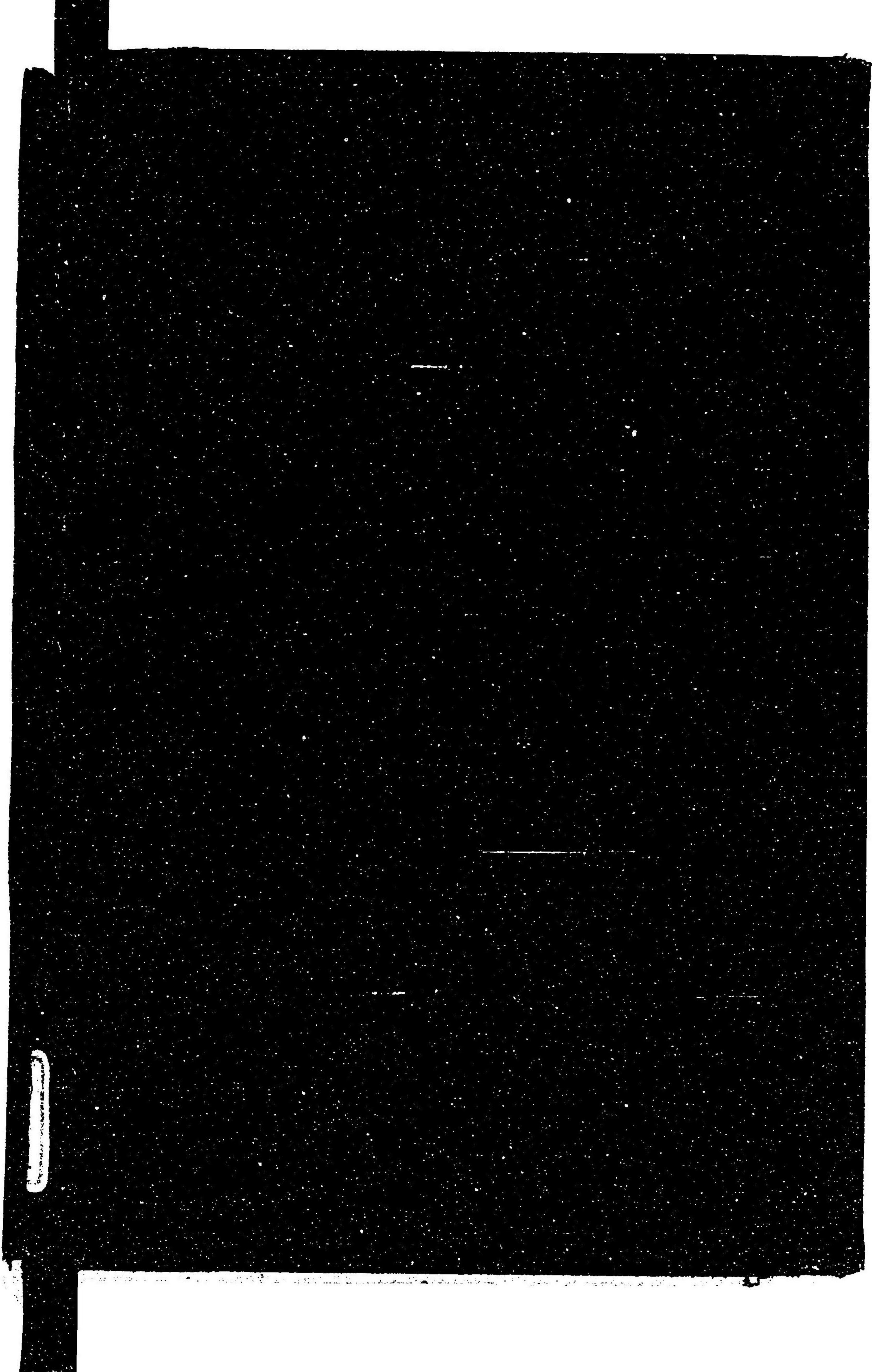
▲▲上製五十錢稅八錢
▲並製六錢稅十錢

文學士井上圓了氏著

佛教通觀

▲▲上下二冊
▲各三十錢稅四錢

21
111



78
44

019331-000-0

78-44

一休和尚伝

高島 圓 / 著

M37.10

ABG-0017



